中国近現代を詠んだ詩人

児玉花外と孫文・陳其美・黃興

中村 義

はじめに

「霧に隠れてしまって、自分の姿をみせない詩人」

哀呪は同時代の青年に愛唱された「明治代表詩人」であった。大正時代に入ると、英雄、志士、義人、浪人、時事等について数々の詩文を残している。それらの中に、中国革命の群像、日中関係の史的変容を題材にした作詩が、比較的に多いのには日本人の西洋文化への情熱が読み取れる。abaj

東洋文人似的がみられ、心ある人にはゆかしかった。花外は、必ず浪漫時代にその名を人道的空想的社會主義者と

さもなくば墓碑銘というべきか。

同年生まれで、交友の深い詩友河井絹之是は、その著で「明治代表詩人」として花外を称賛してはいるが、大正以後の花外
作家井伏鱒二も花外が気になるのだろう。聞き書きの体裁ながら、次のように述べている。

「詩というものは、語呂の上から云って甘味がなくっちゃいかん。その観念が圧倒的に行き渡っていた。世を挙げてそれが大流行だった。しかし、花外さんは技巧を全然無視していた。悲愴慷慨の詩をつくった。垢抜けした語句など見向きも」
せずに、感じたままを在りあはせの言葉で出そうとして、それを押し通してゐるうちに世間に忘れられた人ださうだ。

無器用という事は詩の批評の場合は避けたいが、無器用というふ評語を持ち出すつもりなら、花外さん的生活の仕方によっ
tった男だが、只、児玉さんだけは自分の比類なき先生であつた、と書いてゐる。
花外の詩については多くは「技巧無視」とか「垢抜けない」とか、厳しい文言がなればぶが、いづれも花外の人柄を彷彿させる暖かい話にくるまれて、酷評ではない。島本の「人柄の方が詩を乗り越して目に入ること」をこゝに明治大学校歌自体も作詩過程についても、西条八十の補作に負うところ多かったとの点でですね。

以上で文壇、詩壇から花外への関心と見解が奈央にあるか、ほんと解りたったために、「私の詩は明治四〇年ですぐに終り、それ以後の作品は明治大学校歌である」と書いている。しかし幸いに、『日日に姿を消した君』を探すために、手引となるヒントを与えてくれたのは大岡信氏である。問題は大正の叙事詩の行方である。大岡氏は述べた。

『明治三〇年代には日本武尊や浦島太郎のようなる神話や伝説の人物、義経、日蓮、大関秀吉のような歴史的人物をとりあげて長編の詩を作るのだが、ふしぎなことに明治三六、七年のころにはほほ出し小説として、火が消えたようになる。その時点でも、詩人たちはおおとね叙事詩への野心を失い、近代詩史は叙情詩の圧倒的優勢の時代に入り。
日本語のテキストが表示されていません。
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>倫理</td>
<td>原則</td>
</tr>
<tr>
<td>法律</td>
<td>規則</td>
</tr>
<tr>
<td>道徳</td>
<td>視則</td>
</tr>
<tr>
<td>自己</td>
<td>社会</td>
</tr>
<tr>
<td>他人</td>
<td>自ら</td>
</tr>
</tbody>
</table>

この表は、倫理、法律、道徳、自己、他人の関係を示しています。倫理は原則、法律は規則、道徳は視則、自己は社会、他人は自らを指す。
以上を一考すると、大正時代は主に雑誌「太平洋」に、「昭和に入ると、日華学報」に掲載されている。周知のように、「太平洋」は明治時代が黄金期で、大正時代は教養主義的傾向が文化面に優勢になるにつれて、存在感は相対的に低下して行ったのだと。その意味では「明治代表詩人」で、大正時代は詩壇から離れた花外の詩が掲載されるきっかけ、欧米諸国に向って十分自国人民の権利を拡張し、又た亜細亜諸国の独立を扶植し其の独立を扶植せんが為の亜細亜諸国の改革を誘導促進しむるに在るのみ」という主張は、花外の詩の核心となるにふさわし論旨であった。また花外と浮田

山口昌男氏によれば、「太平洋」の主幹浮田和民は、内外の政治、社会、文明を論し、国際法上の合意に基づいて花外をこのように中国、日中関係の作詩に駆り立てた動機は何か。その解明には作詩の背景である国内外の歴史的諸条件をたどり、ついで花外や同世代の詩人達と共に課題として受けとめた時代潮流及び花外をとりまく詩壇の動向を相互関

昭和五年五月

昭和六年五月

昭和五年九月
連させて考察することになるだろう。
花外研究にそくしてみると、上田信道氏の児童文学研究からの指摘は示唆的である。それにとらえ、花外は「中学世界」との特集「十の二〇才頃」のアンケートに答えている。「少年時代より、文学を愛好せしむ。将来は、政治家を以て立身せる事とかいふことはない。ただ自分の情の行く処に任せ大膽に、自由に、奔放に詩巻などは全然度外視し、欲するままでに放逸に歌ふ事が感出来た」と書いてある。大膽、自由、奔放、放逸ということが花外の自認する作詩の基本的スタンスであった。英雄伝等も書いてある。
明治三〇年代に七五調の「鶴の歌」で、世に認められた。「革命をこれ扇の声にせらへ歌はるう一一番として、「今われ歌をうたふ身は、あやつもかへる闊の世に、自由の光輝きて天地に充ちる歓喜の声楽く日をは待ちかねて鶴と共音に歌ふかかな」で終わる長詩を紹介して、次のように述べる。

まず詩中に登場する人物とその頻度を調べると以下のようである。

中興関連叙詩詩はままに対象とする人物すなわち孫文、黄興等群像の生涯、思想を総括することを第一義的といえよう。
孫文（二六）、黄興（三三）、陳其美（二七）、袁世凱（二六）、章炳麟（九）、李烈鉞（九）、蔡鍔（七）、宋教仁（二四）、伍廷芳（六）、張勳（五）、黎元洪（四）、柏文蔚（四）、唐紹儀（四）、蔣介石（四）、陳天華（三）、秋瑾（三）、胡漢民（二三）、倪嗣冲（三）、洪玉祥（三）、岑春煊（三）、張作霖（三）。

二回は胡瑛、戴天仇、康有為、陳炯明、哈漢祥、張懷芝、王士珍、汪兆銘、何海鴻、安定生、沈佩真、段芝貴、陸宗輿、曹如霖、陸徵祥、張繼、吳佩孚、馮玉祥。

未見の詩もあり、また詩に限定して、散文は対象としないので、完全なデーターと言うわけにはいかないが、ほぼ傾向は現れている。大正時期の日刊新聞を観ると、国外事情として中国の政治動向の記事の占める割合は大きい。花外の作詩の資料、情報の収集は同時代の新聞・雑誌からであり、直接の中国文の関係資料、専門論述ではない。「読売新聞」、「万朝報」、「朝日新聞」、「時事新報」、史論者、史学的研究資料からえられ、梁啟超や張謇等の名も欲しいが、ともあれ、九世紀末〜二〇世紀一二〇年代までの中要人物は登場して、中国近代史の叙述にはことかかない。特徴的には反清朝、反袁世凱運動に活動した革命勢力側を支持し、仇視は袁世凱であった。これは明らかに花外の政治姿勢の顕現であった。彼らの軌跡をたどれば、おのずと辛亥革命、第二、三革命時代の歴史経過の叙述ができあがる。語部とする所以である。

頻度をみると、孫文が圧倒的に一位、ついて黄興である。この結果は今日からみて、二人の中国革命史上果たした役割、そして孫文が圧倒的に一位、ついて黄興である。この結果は今日からみて、二人の中国革命史上果たした役割、それ多重の足跡からごく自然である。しかし三番目に陳其美が入っていわけではない。陳の一六回はただ詩だけに限ってであり、散文を合わせれば、もっと増加する。ところが専門家を別として、現在にいたるまで、陳其美は、日本人にとって、それほどポピュラーな人物ではないにしてもかかわらず、一六回に及ぶのは何故か。花外の歴史観、人生観につながるものと思うので、後述したい。また「章炳麟君を弔ぶ」は章炳麟が逮捕、
この時代に詩人として成長した鬼火花の明治から大正時期まで、作詩の主題的描法が「自由」を仮名をした詩としていた。さらに、自由権力、民権は滅し、非暴力に「孫逸仙に与る詩」（大正二年三月）を対象に出て来よう。（以下詩の偏点引用者）

以上の一連はしまり、孫文の革命道を歌い、最後の一連は次のようである。
君は詩のバイルオン、政論のマチネーか
今支那に国民党は熱烈に大総統に君を推す
理想家は布衣にして虚栄虚名を忌む
よし大総統の高職に就かざと
一平生の思想家として世界を踏み歩む
男児生まれて痛快回天の革命道路を踏面や
微細になは微細自らにして治むべし
日支同盟は黄花の手と手に固く結び
孫氏よ壮快なる自由凱歌を吹け吹け喇叭を快調勇律に
鳴呼一世の鼓吹家よ無冠の革命王孫逸仙！
君乞ふくばは淹留二月春深く
日本憲政花開き、桜花を待って一枝を土産に還り給へ
詩文としては措辞、修辞に美辞麗句、雅語に使顔を用いず、主題の間口孫文のイメイを膨らませるため、多様な歴史的要証を並べながら、物語的叙情的構成となり、語りの要素もある詩作となっている。他方生硬な用語も多く、五・七、七・五調の快いリズミカルさには欠けるが、感情はあり、朗々と吟ずる歌は、ふさわしいのではなかろうか。があって明治三七年四月六日、大阪中之島公会堂で自作の一とき荘先生の霊に告ぐ歌を朗吟し、好評を博したとえに流れて居る。

長い一二連の詩を通じて孫文の政治思想と実践が果たしてどれほど認識され、革命的行為は伝わるであろう。しかし、この長い一連の詩を通じて孫文の政治思想と実践が果たしてどれほど認識され、
総括的叙述になっているであろう。

この一連の詩で「自由」用例は八回である。民権は無い。「自由」は花外の詩心の凝縮した措辞で、いう。自由は花外の人を、広東は自由の気高さ、南は自由の緊張、自由は自由の脱鬼、自由愛国の喇叭、不羁の「自由」の理面の「转向」ではなかったのか。というのは、この花外の権力との緊張関係の変化を表す一例を次に紹介しておこう。花外の「自由」に、圧制をもってしたことを忘却したのであろうか。何を回顧したのか、次のように読んでいる。「自由」の関連で、「自由」は花外の鼓吹家」という修辞がある。"自由"は花外の好む措辞である。明治三七年八月四日

自由の一書生、自由の凱歌を吹く、等々である。「自由」がキーワードになり、孫文の足跡が総括され、叙事詩としてまとめられている。それは、自由は花外の気高さ、南方は自由の緊張、自由愛国家、喇叭、不羁の「自由」の理面の「转向」ではなかったのか。というのは、この花外の権力との緊張関係の変化を表す一例を次に紹介しておこう。花外の「自由」に、圧制をもってしたことを忘却したのであろうか。何を回顧したのか、次のように読んでいる。「自由」の関連で、「自由」は花外の鼓吹家」という修辞がある。"自由"は花外の好む措辞である。明治三七年八月四日
あっ、「時代遅れ」と言われようとも、花外は使命感と熱血をもって、独り、「侠義」に依るアジア主義を掲げ、不平等条約撤廃に立ち向かっている中国革命家に、叙事詩を敬呈しているのであった。

三、一九一六年 ─ 吾は西隣に向かうに至り、亜細亜主義を絶つ ─

先の目録をみると、一九一六年（大正五年）に作詩が集中していることに気づく。地の一角を踏へては年頭の作である。

一九一六年（大正五年）は「国民活動の歳」と詠み、新しい時代の胎動を感じて、日本国内に刺戟のないことに対して、「中国の国民的活動の発展を期待したのであった。反袁世凱運動、後にいう第三革命勃発への予兆であった。以下に四連からなる

公孫樹の黄葉落ちつくこうる

中国近代を詠んだ詩人

二三七
中国近代を詠んだ詩人

黄興氏は二十四、蔡鍔君は二十五
と。蔡鍔は第三革命の魁第一と称えている。
当時留学生については、さねとうけいしゅうによれば、五、六千人の留学生が滞在していたという。花外は「支那留学生
と騒然の衆覇、吾は東京神田の街に住む」（大正五年六月）と詠む。花外にとって、日常もっとも近い存在の中国人は神田
界隈「多く群がりし処、『古巣』とする中国留学生であった。東京府の統計によると、神田に二六人（男二十四、女二
二）が、一定の狭い地域に、集中していたのが神田界隈であった。
中国歴史上、いかなる都市にも、神田界隈のような、若き志を抱いた数千の青年が、正に指呼の間の地域に集中した歴史
的事実はない。神田界隈は中国革命の揺籃地という歴史的意義に値すると思う。花外が愛し、住み、散策し、千鳥足で放浪
した神田界隈であった。花外の時代感覚は、直感的で、大胆ではあるが、神田から遠く中国革命の烽火に望みを託したので
ある。けれども女子留学生には希望をもてていた。
「支那婦人に」は読売新聞（大正五年五月四日）に掲載された五倶の詩である。その四、五値以下のようである（傍点

引用者）
この二連は七五調で、花謝の常套語である「自由」神田流して燕が生かされている。この女性に期待する作詩は、「太陽」の主幹浮田和民が歴史の発展を展望するのに、社会的矛盾（貧困、社会悪）の根絶と婦人問題（男女の差別、女権の力、婦人問題）を主張していることに対応していると考える。

例えば「太陽」（大正五年二月号）の「支那女権大会」をみよう。これは第一連の「多くの男子が心血を濁ぎし第三次革命後」から始まる叙事詩である。傍点引用者。

神田の街と空気は支那留學生に親し、若き支那女学生の往来する可憐の姿に、銅懸の並木の青に衣裳を照らす。萬解の同情を靴の先にまで注げる。

これに我医学校を卒へし、腕にゆう女よ、光るメスを振るって、祖国の女の病脈を治療せよ。芸術家は歌に語に、急進熱血男子を刺激し。東亜のために強き色彩を添へよ。
今は神田の二階窓を、青空に開放ち
隣国より波を伝ってひびく喇叭の音に
支那女権、全国同志大会の消息を聞く
秋風が慟しくリソリンと吹き鳴らす
赤い硝子球の風鈴の下にて
全世界の新らしい女の運動を祝福し
わが未開紅女の発奮を促してペンを駆る
ところで文学史上、大正五年前後はいかなる状況であったのか。門外漢の皆さんに限らず、しかも一知半解の先行研究整
理であるが、文学（小説）においては、村村光夫が隔外、漱石（荷風）、谷崎（谷崎）などの作品を挙げて、大正五年が「文学史の
上で一種の分水嶺を形づくっている面白い時期」と指摘している。一方詩界では、大岡信氏は大正時代の詩と詩壇について、
前時代（明治）との断絶を指摘しつつ、次のように述べている。
大正期の詩は、にわかにその持続性を見失い、あるいは持続性そのものがいくつもに分岐して弱まってゆくという過程
がみられる。汎蓋状態となって大正中期の詩界を覆い、……楽天的で放漫な自由詩の拡散運動が、こうした三勢を凧き
たがべくもなかったために、放漫な自由詩に対して嫌悪反感を持った一派の詩人は、否定しようのない事実であろう。しかも、口語自由詩の時代の必然性と合理性はう
身をおくことによって、必要以上に孤立した世界へ彼を自身の詩を閉じこめてしまったようである。花外の大正時期の詩は、大岡の文では、どこに位置付けられるべきであろうか。「楽天的で放漫な自由詩の拡漫運動」の
いずれかの一端を占める著がある。
中国近代を詠んだ詩人

中国近代を詠んだ詩人

民衆派の萌芽は大正五年前後からであるが、底辻ある開花期を示したのはやはり民衆派発行の頃である大正七年。民衆派の萌芽は大正五年前後からであるが、底辻ある開花期を示したのはやはり民衆派発行の頃である大正七年。民衆派の萌芽は大正五年前後からであるが、底辻ある開花期を示したのはやはり民衆派発行の頃である大正七年。民衆派の萌芽は大正五年前後からであるが、底辻ある開花期を示したのはやはり民衆派発行の頃である大正七年。民衆派の萌芽は大正五年前後からであるが、底辻ある開花期を示したのはやはり民衆派発行の頃である大正七年。民衆派の萌芽は大正五年前後からであるが、底辻ある開花期を示したのはやはり民衆派発行の頃である大正七年。
奇傑陳其美の死

四、奇傑陳其美的死

陳其美（八七〇一一〇一）は、一九一年五月一日に、上海に於て暗殺される。この二号活字の一行に私はピックリして、哀しきが涙さへも出なかった。赤新聞とは夕刊刊の朝報であった。大正五年五月に在上海にて暗殺される！

革命党員の幹部の一人陳其美の暗殺が奇傑陳其美的死を悼む（雄弁一九一年五月七月）という詩文となる。
五年五月二四日から二七日）には上海特派員山中未成（山中峰太郎のことを）が特電記事で事件の詳細を書いています。衝撃をうけた花外は一気に書きあげた。

屋根と屋根が押迫って、其間から青空。詩人の故郷と私のよぶ。と飛び越え、懐かしい白雲（私は私は兄と

活字の一言に、私はビックリしている。哀しきが涙さへ出なかった。

若い革命家の、流された鮮血を直覚して、電灯も、新聞も。夢にも、私の部屋中がみな、陳其美は、支那の革命党員の中でも、私の第一番に好きな漢であった。

喫、若い陳其美。陳其美は、支那の革命党員の中でも、私の部屋がもてなさん、陳其美の紅血で以て染め塗され

その詩は五連からなる叙事詩である。その三、四は紹介しておき。

報国の為に四方に活動す

中支那のため全埜細亜のため

之も支那のため全埜細亜のため

新間記者出の若き陳其美

昔は忠兵は鎧の先生

現時君は筆も生命も棄てる覚悟

憂哀四百余州の民族を思ふる。
第二革命の華々しさき際よ
爆弾抱いて恐怖なく
数々高い煉瓦塀を跳込みて
大膽突飛に内外を驚かせし

陳其美的略歴を述べておこう。
浙江奨奨県生まれ。少年時代に賃屋と紡織業の手代をした。
向学と救国の志を得て、一

 Amateur's Poem

革命宣伝に尽力した。一九一一年七月には中部同盟会の幹部になり
秘密結社に接近すると同時に、「中国公報」、「民声叢報」、「民立報」などの創刊にあたり

地方で革命運動に従事した。

民國成立後、革命派の有力な指導者陶成章殺害の疑いをか

南方製造局を攻撃した。ついで南京を押え、上海都督になった。

中華革命党結成一九一四年

例に過ぎないが、陳其美と親交のあった代議士菊地真一の夫人の語るところによると「色の蒼白い弱々しい様方で夫など

中国近代を詠んだ詩人
変事の前兆のよう、寂しく眺められます。「読売新聞」大正五年五月二〇日、「花外に陳と直接の交友があった形跡はないが、生い立ち、風貌、人柄、活動ぶり等については承知していたにちがいない。花外は陳をなぜ丸橋忠弥に無差別な故事を唱げたか、草、詩を捧げたのであった。そこで陳が忠弥の死を悲しむのに、花外は陳をなぜ丸橋忠弥に無差別な故事を唱げたか、月前の大正五年三月の「冒険世界」に「丸橋忠弥と陳其美」を掲載していた（未見）。

詩人花外の陳其美は自己の情熱の赴くまま、丸橋忠弥に偽託して描かれ、歴史的に実像が定かでない丸橋忠弥である故、その比定はゆるされるよう。そこで花外の陳其美像が形成過程を、童話的なから、構成してみると、以下のようになろう。忠弥は徳川幕府打倒を策した慶安事件（慶安四年一六五一）の指導の一人であり、江戸で塩硝蔵に火を放って混乱を惹起して、討幕を断行しようとしたこと。壮絶な役回りは、徳川を代表する人物の姿を示すものである。二人の Dramatic Action がはっきり、締め切りが少ない。丸橋忠弥は花外を宝蔵院流の槍の使い手で、お茶の水あたりで道場を開いていたという。行動の豪胆さ、表情的でも何よりの酒好き、特に世界の平和の為に、支那は何しろも日本に頼らなければならぬというアジア主義に共感している。孫文叙述で頻発した「自由」の用例は消えて、代わって、アジア主義が積極的な格別の一語となって来ている。
に似合わぬ激しい行動に飛び込む姿にほれ込んでしまったのであろう。花外は書いている。

革命党の急進派として、余り華々しく行い過ぎたので、その結果同志の間にも誤解されて、悪さをされ評判をされた。嘘

美という物が、未だとうして真っ天折したのが悲しい。

こうして陳、丸橋そして花外の三者が、留学生的活躍する神田を舞台として、酒を濁滑とする共鳴盤が成立し、次に叙

日本留学生の時代には若き陳其美

一歩踏出しや男女の異装者留学生

神田の町は鴨燕と支那人的巣窟

眼鏡の中の光る美眸をいまも見る如し

街路に初夏に繁る青い鈴懸の葉

若き革命家の熱情の顔が見くらしぐ浮ぶ

青葉しけれど戻く死にたる陳其美が哀し

千の士を踏めば吾も陳其美とななる心地。
五月の日の日、神田に風吹く日
中華第一樓に吾は登り
支那の丸橋忠弥を弔ふに吾も、忠弥をきめ込み
怪男児の一生を懐へば感慨無量
陳氏を嘆き独りして酒酌む
紅い強烈の支那酒は凜ら血の如く
其上に熱涙ぞぞてた小さ海をなせり
奇傑を悼む革命歌をうたへども
吾声は哀調を帯びて極めて低し
革命に殉せし若き東洋の志士のため
波も悲しめ上海の客室に
兇悪の北国人の撃放つ弾丸に
懐れ若き陳其美は殲れたり
美男子の右半面が硝煙に凄い紫色
惜い血を流せしか、半生に艶聞も伝はりぬ
大森の曽楼の女中よ、吾と共に泣け
革命成功して支那大陸の曇も見ず、
犠牲的の英雄は夕焼なくて沈む死の淵。

五、黄興
英雄と詩人は永遠に併伴なり

花外、黄興について、多く詠んでいる。わけても一九一六年（大正五）の作品には、人間黄興の魅力描写に満ち満ちて

連では「革命将軍黄興、黃興は革命の行き逃し」と、群雄の一人としての列記に過ぎなかったが、同年七月の支

那南方に寄するの詩」なると、黄興への関心は高まり、叙述もはるかに豊かになる。第一、二革命と黄興の役割の重さを

黄興よ、孫逸仙よ」という、四連では黄興の生誕の地湖南省を称え、こ地や黄興や宋教仁や革命家の故郷、湖南

黃興よう。孫逸仙よ」。彼花外の社会主義的口吻を聴くとけど、もとより社会主義の理論に出発した哲学者の思惟の叙情的発声があるわけで

彼花外の社会主義的口吻を聴くとけど、もとより社会主義の理論に出発した哲学者の思惟の叙情的発声があるわけで

従って英雄を弔ひ、光秀に同じ、黄興に感し、バリトンを讃すと等しい無思想の普通人の大さっぱな感慨にすぎない。

（倉点引用者）

黄興は一九一六年、アメリカ亡命から、日本を經由して帰国、間もなく上海で革命の生涯を閉じた。日本の新聞各紙もこ

中国近代を詠んだ詩人
一九三九
「黄興君を迎ふ」（六月）はアメリカからの帰途に立ち寄った時、秋葉散る黄興（十二月）は黃興の訃報を得てからである。新事実の発見はないが、一九一六年の黄興を詩に詠んだ事実は貴重である。その前にさっと黄興の略歴にふれておこう。

中国近代史上、革命的民主主義者として生涯を貫いた黄興は、孫文の最良の同志であった。約一五年間の革命運動の内、八九年月、国外亡命生活を続けた。日本には昭和五年半滞在した。革命活動の三分の一であり、非常に長い。それゆえ日本と人との交友もふかく、知己も逸話も多い。湖南長沙の生まれで、宋代の著名な詩人黄庭堅の末裔といわれる。黄興自身も詩は巧みで、酒は北魏風である。この文人的趣味は孫文とは違って、自身も尊敬していた。宮崎滔天は誰よりも黄興と親密で、家族ぐるみの交際を続けた。この経歴と人柄、また常に革命の現場で先頭に立って指揮した黄興は、花外の好みて、また敬愛していた。孫文は先生、孫文は修辞、自由の用例がないことは、実に対照的である。花外の孫文、黄興に応じてのイメージは孫文が理想家、黄興は実践家と一般に流布していた認識によるとも考えられる。すなわち黄興像の形成は政治思想理論等と無縁な行動的人物という印象が先行し、そのために黄興の前述したような日本人好みの人柄、風貌、度量などが花外を刺戟し作詩の主流となったのである。しかし決して日夏のいう「大さっぱな感慨」でないことは断言したい。
義に勇気皆強し、黄氏一たび黄の巨手を挙げば…。…其一〇万の兵雲の如く群集り——支那の西郷隆盛等である。端的に

秋は悲しや、東方は殊に秋風秋思ふかし

十月三十一日、星影青白き午前四時

黄興氏上海に於て逝く。

急電は火燕のやうに全世界に伝はる

渠が一生は国家民衆のため奮闘従身の連続

燦然民国政体の確立に先ちて独り冥闇に入りぬ

理想家の孫逸仙と、支那名物男として謳わせし

実行派の巨擘、革命の巨花黄興死せり

黄興氏のやうに火と血と剣の活歴史

光緒二十七年、花と武と義を尽く日本に来り

光緒二十五年、唐才常と挙兵を皮切に

章炳麟、陳天華、宋教仁、劉揆撲一等と「華興会」を起こし

三十一年、三年、四十三年、遊説に、暴動、攻撃に違あらず

遂に第一革命の武漢に、赤く爆発すらす

中国近代を詠んだ詩人

【四】
漢陽漢口に転戦大功、大元帥となり
南京政府に陸軍部総長兼参謀長に任ぜられる
後、宋教仁事件に袁世凱と衝突し、米国に放浪

黄興の抱擁力は海のよう、山の如くに重く
其の膽力は生生、山の如くに重く
德望は花と高く薫り、友党部下を飾はせり
先辛万苦、剣か絹、身は幾度か危険に顕し
一代怪物袁世凱の毒黒手も、赤誠実の人に及ばず
功名も、義の為に、生命も去方の如く思い
南北協和政府が、勅章贈るに答へ

同志の白骨を胸に佩るのは嫌だ
南九北九、革命道楽の一に
黄興は、命かげ革命道楽の一に

国事を験策し、朝閑に、植木盆栽をなごる

一語処然として、後世栄達家を懐死しむ
同胞志士が血を讃成する民国政府の建設半ばの頃に
広東で怪我した時、波ひく白樹に横ばう
日本の浴衣を着た高を願いみろ、酒落の快馬子

革命と波、英雄と詩人は永遠に伴伴なり

上海佛租界的「霞飛路」の街の窓より

赤き雄魂は弾丸のよう、秋の蒼空に飛びぬ

最初革命の旗破れ、その身は張之洞一味に捕られる

南風北馬に狂奔し、旅の衣も塩と土臭き幾歳月

今年の上に、君の名は清く鶴の如く舞ふ

昔も雲の上に、君の名は清く鶴の如く舞ふ

折しも日本の秋に、公孫樹は黄に染みて美はし

英雄の艱難の生涯と、悲壮の末路を懐ふ

君は西郷南洲の人物を、火の如く敬慕せり

堂々三十三貫の堅忍不抜の支那の豪傑よ

【張之洞、獄舎】の事実なし

中国近代を誚んだ詩人

黄花門誓兵（丙二年四月廿七日）
今上野の秋に、南洲の銅像に銀杏が散って照す
黄興が記念像は、須らく揚子江畔の波打際に立つべし
門柱の標札にやさしく『中田』と書いた
黄興氏亡命当時の目白の隠家
老母と正夫人と主人が調度道具も涙の種
末女節子が花モスリンの支那服は愛憐
 Removes the year of 二年
同志孫逸仙、宮崎滔天も血族の家人さへ
同居ながら、突如の胃潰瘍の急変に
枕頭、淋しく死に目に遭ひざし悲劇よ
古來奇傑は、孤独に生き孤独に死すが運命か

ああ南方、南といへば太陽に熱き涙おつ

黄氏が故郷、湖南人の発起にて

秋十一月五日、帝国教育会講堂にて
留學生の追悼会は菊花を飾りし十八日

留学生の追悼会は菊花を飾りし十八日

大手町の大日本私立衛生会にて、盛大に行はる

香典料二万円、国葬費五万円、儀仗兵何等の栄典ならし

※現在東京豊島区西池袋二の一五
逝し国土黄興氏には祖国民心の真情覚と涙一滴にて足れり
曽て生前三十万両の懸賞の首が、今や天下の惜む宝物
吾は此弔詩を綴る十一月九日朝
「蔡鍔死す」新紙を見て手は顛ひぬ
噫支那革命青年党の首領蔡鍔は
福岡病院にて癌を病み、痛渇のやうに死す哀れ
袁氏が帝政を布き、皇位に登るや
君は唐継続と共に雲南四川に兵を挙ぐ
今次の革命戦に魁第一
君は黄氏と湖南に生れ、同じ革命に殉じて死せり
黄興氏は四十四、蔡鍔君は三十五

※雲南での護国軍挙兵
中國近代を詠んだ詩人
中国近代を誇った詩人

「東洋の事は日支親善に倹ねばならぬ」

東方の波と波、人と人とは固く手を握れ！

黄興氏、吾は此の熱ある一言、在天の英霊に捧ぐ

第一連の『実行派巨擘』は『孫文が理想家』との対立である。二連は黃興の実践を「火と血と劍の活歴史」として彼の軍事的活動を順に叙述する。三連と四連は面目躍如である。黃興が孫文以上に日本人に親しめたことが背景にある。文武両道である。そして「功名も義の為に、生命も土塊の如く思ひ」という。

第五連が花外が言いたかった修辞ではないだろうか。『英雄と詩人は永遠の侣伴なり』はバイロンにあこがれた花外の即席であった。それに口癖のように、「東洋の事は日支親善に倹ねばならぬ」と。

花外の黄興認識には孫文を理想家、思想家と認識するのに対比して、実践家というのが前提である。したがって、花外の得意な人間、パーソナリティを巧みに物語的文脈で叙事詩にまとめたことで、成功したと考える。

古語、雅語を駆使した絶妙たるロマンティックな詩とは程遠いが、黄興の生涯、思想、風貌を情感こめて、見事に伝える。故郷長沙に眠れる黄興君に連は、
大正時代の花外の中国関連詩を専ら対象として論じてきた。『太陽』や『読売新聞』という有力雑誌や新聞に毎月のよう
に飾った花外の叙事詩は詩壇からは無視されていたが、果たして、一般読者に、どのように受けとめられたのか。愛唱、吟
詠はされたであろうか。反応如何は関心のあるところだが残念ながら、明らかでない。大正五年前後は第一次大戦下の東アジア、そして邦人においても二
条要求で中国問題がクローズアップした画期的時代であり、世
相は景気を酔いしめた時代であった。『天性の詩人肌』の花外が独り
抜け、と批判がであろうとも、中国を詠んだ不滅の成果である。
またと申し花外の大正の叙事詩は詩として『技巧無視』の一
垢とは、近代日中関係史上類例がない、まことに稀有なことである。
その事について、花外を詠むなら、中国に紹介する価値がある。それ故に
本文でも繰り述べたが、花外の詩を醸し出すには、『自由』の
一語が彼の明治大正時代の詩作の主題、キーワードであっ
た。明治時代にあっては、近代日本における権力支配に対決しての『自由』は、にぎやかに意味がある。そう考えると、大正時代
の詩には、孫文の用例をあげたように、「自由」が頻出するもの
の一例、自由自在の『自由』、人間社会の
むすび
規約を離れて飛び回る英雄の自由、その讃歌のための措辞となった。一方黄興の叙事詩には「自由」に象徴されるような理念、思想の次元にとらわれない、史的事実とパーソナリティーが物語的に構成されている。その点孫文とは対照的であった。

昭和時代に就いては、すでに枚数の予定を越えてしまい、校を改めたいが、昭和時代は詩のトーンが軽妙になって来てい
る。そんなに七七調、七五調をとり、行数も一定になり、いわば定型詩となっている。情熱を帯びて、共に悲愴慷慨する相手はすべて去ってしま
った。ただ壮志のの中に生きる彼らであった。したがって短絡的推論ではあるが、生々しい場面、同時代の緊張感からでな
く、時間の空際にも、対象との乖離のためか、過去の歴史的人物、事実として対象化し得る余裕が出来たのである。詩
型、措辞、修辞も言うならば情緒的調子が詩脈を貫くようになる。例をあげると、

紅金山なる孫文に
紫句花あやめ
国父に捧げる誠かな
南と北と結ぶべく

【英雄と詩人は永遠に傍伴なり】という緊張と情熱の詩心で接して孫文や黄興や陳其美を詠んだ大正期の息吹はなくなっ
ている。ただ七七調のリズミカルな弦が、霧の彼方から、アルコールの香を漂わせ、闇こえくるのであった。